

「臨床発達人間科学」(エンパワメント)の基本的視座構築のために — 主に、「特別な才能をもつ発達障害児の問題(2e, twice exceptions)」を通じて 「社会病理」・「社会福祉」・「特別支援」について再考する 若年女性のための「福祉教育」について —

For the basic constitution of clinical development human science.
— Reconsideration of “social pathology”, “social welfare” “special Support”
through examing “2e problem”, and about “welfare education” for young women —

入江良英
(こども学科 特任教授)

要旨 「臨床発達人間科学」、「社会病理学」、「社会福祉学」、「特別支援学」に共底する認識論的な視座構造を構築することを企図している。そして、特異な才能をもつ障害者に関する「2e(twice exceptions)問題を考察することで、「共依存」を超える「自立」に基づいた「社会的包摂」(social inclusion)について考察している。続いて、「心理—社会問題」という二分法を超えることのできない「近代主義的な社会科学」「実証科学」の限界を説き、「科学革命」の必要性を主張した。またこの主張を補強するために、精神分析学者、北山修の「見るなの禁止」論を援用した。最後に、保育士養成の長年の夢である「反省的实践力」を備えた保育士をいかに育てるか?という観点に拠り、「具体的な物語」を鑑賞・解釈することから、“well-being”などの抽象的な理論を理解できる「社会福祉教育方法」について論じた。

【キーワード：2e問題 ベーテル 見るなの禁止 相互的排除 第三の道】

1. 埼玉純真短期大学「特別支援力養成のための教育職員再教育プログラム」(社会人の学び直しプログラム 平成19年度～21年度(GP)から読み解けるもの インクルージョンの困難性 共依存をいかに超えるか ドイツ「ベーテル」の福祉も参考にしつつ

1-1 プログラムの趣旨 取組への基本姿勢 実施状況

「特別支援教育」導入後、現場での「(軽度発達障害)の幼児・児童・生徒へのアセスメント治療教育のニーズが高まっている。同時に現場の保育士や教員からは、その対応において苦慮する声も聞こえてくる。本学は、保育・教育の現場と学術研究の間に位置する「保育・教育系短期大」としてこれまで多くの保育士や幼稚園教諭ならびに、小学校教諭を送り出してきた。上記の状況を打開するために、その蓄積した知識技術を利用して、「軽度発達障害」に関する真に実践的な実りある研究成果と教育を「社会人の学び直しプログラム」として供出できると考え、ここに地域の保育士・教師、さらに父兄のための「(軽度)発達障害の幼児児童に対する特別支援力育成のための教育

職員再教育プログラム」を実施した。これは「幼児教育・保育の高度化」という保育・幼稚園変革期を乗り切る目的とも、MI理論(multiple intelligences)に拠って「障害と才能」が重複している事実を考えた場合、「教育立国日本」の有為・有能な人材を育成するというテーマとも合致してくるのではなかろうか。

次にこのプログラムの取組への基本姿勢について述べる。

学内に設置した「社会人の学び直し委員会」における検討の結果、以下のように基本姿勢を決定した。

- ① 発達障害を人間科学の根本問題として捉える。
- ② 障害児の潜在能力の発達を促す。
- ③ 多重知能観などの新しい知能(能力)観を採用する。
- ④ 障害児治療に「読み」と「語り」の効果を確認する。
- ⑤ 人間の究極的な行為としての「遊び」の重要性を再確認する。
- ⑥ 「癒し」に対する芸術の重要性を再確認する。
- ⑦ 発達障害児支援機器の活用と開発支援援助を

する。

さらに事業の実施として、受講生の「地域分布」と「職業分布」についてと述べると、埼玉県76名、群馬県16名、栃木県3名、茨城県3名であった。受講申し込みの職業分布は、保育士23名、幼稚園教諭21名、小学校教員32名、中学校教員2名、高等学校教員6名、教育委員会1名、施設職員4名、その他（保護者等）9名、計98名で、予算は2100万円であった。^{注1}

1-2 プログラム実施から読み解けるもの

以上概観してみたが、本学の位置するH市においても「(軽度)発達障害の幼児童に対するケア」の必要性は認識されており、具体的な施策は講じられつつあるものの、とくに「認知的関心・知能(才能)援助」の方向からはまったく進んでいないといえよう。さて、H市を中心とした北埼玉において「発達障害」「人格障害」の問題に積極的に関わり、真に民主的なソーシャル・インクルージョンを達成することは不可能なのであろうか。

あらゆる幼児童は、目に見える障害をもっているが、大きな潜在能力を有している。一方われわれがノーマルとみる成長は、ある意味では「歪められ疎外された」成長である。「個人-社会問題」は、「自己言及」の問題がかまびすかしい現在、再び重要なテーマとなっている。「発達障害」や「人格障害」の問題が、古来からの「アノミー問題」「心理-社会問題」「一致(個性と普遍の, Kontingenz)の問題」に通じており、そしてその克服を通じてのみ、巨大な人間変革、歴史・社会・世界変革が達成できることを考えた場合、H. ガーナーのMI: (multiple intelligences) 多重知能論やマンハイムの「無意識の次元の陶冶を含め広義の教育論」(開発系と臨床系の一致)をはじめとする人間形成論は、「臨床人間科学」の基礎を築く思想として、さらなる研究・考究がなされるべきであろう。

「特別支援教育」の立場から、言い換えるなら、支援教育の立場を、原則的に、障害児・定型発達児の区別なく個人の「興味」「関心」を伸ばしつつ、その「潜在能力」を開発し、自立した個々人からなる「ソーシャル・インクルージョン」を目指すことは、人間の創造力と同義であるイメージを重視した「新感覚統合論」^{注2}と呼ぶべきであろう。

それは「新しい公共性」の構築を行うものである。昨今とくに市民主体、地域主体といわれるが、個人の潜在能力を開発し、市民主体、地域主体の社会を構築することはわが国だけでなく、世界のどの国においても至難の業であると考えられる。

1-3 「共依存」を超えて「自立に基づいたインクルージョン」を求める ドイツ連邦共和国ビールフェルト市福祉コロニー「ペーテル」を参考にしつつ

埼玉純真短期大学のプログラムにおいて見られたように、日本において「共依存」ではなく「自立性に基づいた真のソーシャル・インクルージョン」を阻んでいるものは何であろうか。それは河合隼雄が『母性社会日本の病理』^{注3}で述べたような、「すべてを最終的には包み込み、自立させない保護主義的心性」である。もちろんこの心性は、「思いやり・慈愛心」にも通じるのであることはいうまでもないが、敢えて言い切るなら、日本的な心性においては、保護すべき障害児童が、才能をもつということは、本来的には許せないのである。またこの心性の複雑さを精神分析学者である北山修は「見るなの禁止」^{注4}と呼んだ。

この理論によると、日本人の原罪とでも呼ぶべきものは、「イザナギーイザナミ神話」まで遡れるという。細かい説明は省くが、要するに日本神話において、イザナギにより見捨てられたイザナミによる恨みが、精神分析により観てとることができるというのである。日本の社会はその原罪により、「弱い父性」(合理性)と「傷ついた母性」(非合理性)から成り立ち、社会的正義が確立されないのである。この現象は、実はインドネシアバリ島の「魔女ランダ信仰」^{注5}にも見られるもので、等しくアジア社会が影響を受けているものであろう。それは一言でいえば、「恨みをもった歪んだ母性」なのである。

では真の意味で「自立心」と「慈愛心」を統合させた「インクルージョン」はどのように可能なのであろうか。もちろん完全に模範となるものは存在しないかもしれない。ここではその一例として、ドイツ連邦共和国、ビールフェルト市福祉コロニーのペーテルの取組みを簡述する。

それは極めてプロテスタント的な厳格なものであり、時には司牧的と批判されることもある。俗

に「ベートル」と呼ばれている施設は、正式にはフォン・ボーデルシュヴィンク・アンシュタルテン (Von Bodelschwing Anstalten) という福祉コロニーであり、ノルドラインベストファーレン州ビールフェルト市に位置している。

この施設は、1876年に十余名のてんかんをもつ少年たちのために始められたものであるが、現在、町には幼稚園から中学校、ジムナジウム、特別支援学校、特殊学校、病院、ホスピス、ホームレスの保護施設などもあり、施設はドルトムント、デュッセルドルフ、フライシュタット、ベルリン、ライプチヒ等、またアフリカのタンザニアにも広がっている。^{注6}

ベートルの理念においてもっとも大切なものとして、「人間はすべて障害者である」「才能を見つけて伸ばす」というのがある。はたして世の中に完全な健常者というものが存在するのだろうか。人間は欠点があるからこそ人間なのであり、欠点があるということは、逆に言う才能力があることを意味する。自閉症者の特異な才能などはよく報告されているが、「脳のつくり」を見ても実はそうなのである。

ベートルにおいては、障害者に競争や自立を促す一方で、「ホスピス」の活動に見られるように、きわめて慈愛に満ちた活動も行われている。ドイツでもまだ数の少ない子ども用ホスピスが2011年夏までに完成された。ベートルは、すべての人間の平等、機会均等、尊厳が守られなければならないと考える。本当の意味での「自立と支援」「セーフティネット」は何かということがこのように考究されるべきであろう。

ベートルのような「福祉コロニー」は、もう時代遅れだという指摘をする向きもあったが、現在のベートルの隆盛を見るにつけ、その指摘が必ずしも当たっていないこと、またベートル自体もグループホーム等の制度も取り入れ、昔のようなコロニーとは一味違った方向を目指しているように思える。

やはり福祉には、多様な価値観の中にも、「共同体 (gemeinschaft) 的な、一種の使命感も必須ではないか。そういう意味で「自立」と「共生」という未来社会で必要とされている二つの社会理念を最高度に達成しているベートルは、プロテスタントの試みということで、もちろん日本に直接シス

テムを導入できるわけではない。しかしこれは「福祉・インクルージョンの模範」というだけでなく、「未来社会の模範」の一つとは言えるのではないか。

2. 「発達障害」について、「発達障害」は重なることがある、「発達障害」は一人ひとり異なる「発達障害」と「人格障害」の関連性、「2e (twice exceptions)」とは何か

2-1 「発達障害」について 「発達障害」は一人ひとり異なる

発達の各々の領域はすべて相互に関係している。たとえば認知の遅れがなくても、社会性の遅れがあるといったように、各々の要素は快晴、ある程度独立した問題でもある。社会性の遅れと知的な遅れを一緒にもつ者。社会性の遅れはあり、知的な遅れはないが、学習の遅れと微細運動の問題(いわゆる不器用さ)をもつ者、集中力の遅れと学習の遅れを一緒にもつ者など。診断名をつけることは、まことに難しいのである。

例えば、注意欠陥多動障害 (ADHD) と広汎性発達障害の一群であるアスペルガーとの併発は、より重大な社会性の障害の方が優先となる。したがってこの場合は、「アスペルガー症候群」という診断となる。

実は、例えば「自閉症の診断法は、専門家の数だけある」といわれている。自閉症は単一の原因によって生まれるものではなく、複数の原因に由来した障害をもつ症候群である。しかもその症状は、一人ひとり微妙に違うため、自閉症の数だけ自閉症の物語があるといってよいのである。表に現れる症状のうちの何を本質的なものと判断するかによって、診断法は異なる。

自閉症の発見者であるレオ・カナーが1943年に認めた症状は、次の5項目である。1. 周囲からの極端な孤立、2. 言葉の発達の歪み、3. 脅迫的な同一性保持の傾向、4. 物に対する特別な技能や優れた記憶力、5. 潜在的な知能。4. の「特別な技能」は、イディオ・サバン(聖なる愚鈍)に通じるが、厳密には自閉症児の十分の一の者がもつとされている。

何よりも忘れてならないのは、自閉症の発生論を一般化して論じて、自閉という事態を個別に生きている子どもたちの問題を解決することは

きないということである。また自閉症は、「治癒」ではなく「仮性適応」ができるようになるだけだとも言われている。

2-2 「発達障害」と「人格障害」の関連性

発達障害と人格障害の関連性はよく指摘される。アスペルガーの青少年が、歳をとり、その障害が大人になって症状が固着した場合、当然それは、「人格障害」になりえることはいままでもない。両者はきわめて親和性をもっている。「自閉症」「ADHD」も人格障害と大いに関連している。

またパーソナリティーの偏りにより、さまざまなタイプに分類されるパーソナリティー障害であるが、いずれも明確には線引きできない。パーソナリティー障害は、通常、10タイプに分けられる。
①妄想性パーソナリティー障害 ②ジゾイドパーソナリティー障害 ③失調型パーソナリティー障害
④演技性パーソナリティー障害 ⑤境界性パーソナリティー障害 ⑥自己愛性パーソナリティー障害
⑦反社会性パーソナリティー障害 ⑧回避性パーソナリティー障害 ⑨依存性パーソナリティー障害 ⑩強迫性パーソナリティー障害、この他特定不能のパーソナリティー障害も存する。^{注7}

ある一人の人間が、人格障害の状態にあるのか、精神病の状態にあるのか、あるいは正常者の周辺に属しているとすべきかは、専門家にとってもしばしば判断に苦しむ問題である。人格障害のもう一つの問題点は、その類型学の曖昧性にある。人格障害全体を、どのような種類のいくつかの分類の中に納めるべきかという類型学上の論争は、精神医学の歴史が始まって以来、今日までくり返されてきた。

現代、精神科学の中での国際的診断分類基準とされているDSM-II,DSM-III,DSM-IVですら毎回改訂されるごとに、分類方式と名称を変更している。

2-3 「2e (twice exceptions)」とは何か

上記のように「(軽度)発達障害」の子どもは、特にすぐれた才能を示すことがある。発達障害の子どもたちは、知能全般が落ち込んでいるのではなく、特定の技能に関して学習が困難だったり、行動として不適応だったりする。認知発達の凹凸

が激しいのである。

2eの天才として、マイケル・ファラデー、アルバート・アインシュタイン、ルイス・キャロル、アンリ・ポアンカレ、トマス・アルヴァ・エジソン、レオナルド・ダ・ヴィンチ、ウィンストン・S・チャーチル、ジョージ・S・パットン、ウィリアム・バトラー・イェイツ、日本でも野口英世、山下清、南方熊楠、葛飾北斎、織田信長などが挙げられる。これまでは、このような2eを意識して、教育を考えることは少なかった。

T.G.ウェストは、『天才たちは学校がきらいだった』の中で、障害と困難にもめげず、大変化が生じていると述べ、以下のことを主張している。^{注8}

- ① 物理、工学、数学、政治、文学などの領域で、もっとも独創的な人々の何割かは、視覚的思考に強く依存していて、言葉や数字のかわりにイメージを用いている。
- ② 学習困難の大きな特徴パターンの中にある特性は、桁はずれにたくさんある。一中略一明白な因果的仕組みが、一種の神経学的な乱数発生装置として働いていて、きわめて多様な強みと弱みを生み出し、社会や文化全体の変化に適応するようになっているのである。
- ③ 視覚・空間的能力は、多くの創造的分野で、現在一般に認められているよりもっと大きな役割を果たせるようになるだろう。
- ④ 視覚的、空間的思考モードは、複雑な問題を扱うにはうってつけに見えるし、芸術ばかりか、科学の創造的な成果に密接な関係があることが多い。
- ⑤ ここ400年ないしは500年ほど、高度な言語志向の教育、知識体系が成長してきたが、われわれは今、それと反対の、複雑な情報が視覚的に処理されるようになる新しい段階の始まりを見ているのかもしれない。
- ⑥ 現代世界で重要な問題の多くはきわめて複雑で大規模な、気候や生態系の理解といったような問題である。こうした問題が現実的に深く考えられるようになったのはつい最近のことである。というのは、莫大な量のデータを高速で、しかも安価に入手して保管、処理できるようになったのはつい最近だからである。
- ⑦ こうした複雑な系の問題は天賦の才を持つ視

覚思考型人間がもっとも得意とするものであるう。

- ⑧ 昔から伝統的な教育で推し進められきた多くの技能——すばやく読めること詳細な事実情報を間違いなく思いだせること、速く正確に計算できること、きれいに書けること、正しくつづること、決りきった数値データの伝統的な前後的解釈など——は、機械がもっとうまく、速く、安くできるようになっていくので、その重要さも価値も次第に失われていくかもしれない。
- ⑨ きわめて複雑で問題の吸収と理解にもっともふさわしい人々は、伝統的教育システムの低いレベルで、大きな障害のある人物に他ならないのかもしれない。
- ⑩ ・最終的には、伝統的教育システムが、間違っただ種類の技能にばかり集中して、間違っただ種類の学習を奨励している場合があるかもしれない。経済や社会が根本的な変革を経て、深く、より基本的な学習を要求しているのに、それに対してもっとも寄与することのできる人物を、伝統的な教育は系統的に取り除いているのかもしれない。

また「障害の遺伝子」が、実は「人類の進化」と関係しているのではないかということ、かなり広く語られはじめています。(H. ガードナーの「多重知能論」、金子一「逆システム学障害論」、正高信男「天才脳は『発達障害』から生まれる」等など)。「2e問題」は、既存の社会病理学の分野での「障害の価値転換」の問題とも関係しているのである。

以上の意味で、「ラベリング論」もやはり有力である。器質的なものはあるとしても、進化(進歩)の過程において、その時代・世界を担う「非民主的権力」は、「人格障害」「境界例」「自己愛障害」(病態の次元は異なるが)「アスペルガー」「高機能自閉症」「ADHD」などを生み出し、排除し続けているのである。しかしより良き、高き人格へと導く「民主的権威」については、「発達障害」をも子どもたちを、社会の中で能力を発揮させるためにも考究されねばならないだろう。

またH. ガードナーは、「究極的に重要なことは人間の様々な知能に関する種類のすべてと、その組み合わせを認識して育てることである。人間の知能のすべてを結集して、倫理的に結びつけるこ

とができれば、地球を繁栄させることさえできるだろう。有る知能をもっていることは、多かれ少なかれ『ある種の才能』をもっていることを意味する」^{注9}と述べている。本当のインクルーシブ保育・教育とは、まさに人間の知能をすべて結集して、地球を繁栄させることなのかもしれない。

3. ポストモダンが「社会病理学」「社会福祉学」「特別支援教育」に示すこととは!

「相互的排除」を超える 「社会病理学」において二つの視点を統合すること(個と普遍の一致)

3-1 ポストモダンが社会病理学に示すこととは

「相互的排除」を超える

上記の2e問題もから解るように、社会的か否かは、固定的ではなく、極めて相対的である。よくいわれるように、「病理性の判定主体」も不明確なことが多い。しかし人々の「私事化」が進み、「やさしさの病理」が人々を包み込む時、ある種否定的な部分もある「自己言及」が進みつつあるのかもしれない。

森田洋司は、『新たなる排除にどう立ち向かうか」^{注10}の中で、「ソーシャル・インクルージョンは、社会的排除過程を無化したり相対化したり、状況に拮抗する社会過程を作り出す営みであり、そこにこそ、この概念の戦略的、実践的な意義が存在する」[私事化]が常に[全体化]すべてをないし[公事化]の流れと拮抗しながら、両方向のベクトルのダイナミックスの中で展開されるものとして捉え、全体のベクトルとしては、人と社会が編み上げる公共性のより良き状態へとらせん状に進行させていく社会の実践的な営みとしてとらえる視点が必要である」と述べている。このことは、つまり「個と普遍の一致」(Kontingenz)のことを述べているのだと考えられる。

ポストモダンによれば、文化とは、生活習慣の積み重ねとして成立している。そして人を知らぬ間に拘束してしまう。文化とは、生活習慣の積み重ねとして成立している。そして人を知らぬ間に拘束してしまう。文化とは、その文化によって得する人も含め、誰も主体とならない「権力システム」なのである。例えば、途上国の政治家(男)

と結婚した先進国の女性について考えてみよう。
この女性は、先進国の女性（白人？）ということで、
植民地主においては、夫である男性の上位に立つ。
しかし女性差別としては、明らかに夫の下に立つ
のである。あらゆる場所に政治を見出すポストモ
ダンでは、優位と劣位は、見事とって良いほど
容易に逆転するわけである。劣位の側も優位の側
の見方を共有することで、「ひとつの文化」とな
るのである。前述した2e問題がまさにこの問題を
呈示している。

3-2 「社会病理学」における二つの視点を統合すること

畠中宗一は、「社会病理学から臨床社会学へ」
 という論文の中で、「社会病理学」は歴史的に見て、
 [social pathology] と [social problem] の両方
 の意義を抱え込んでいる、と述べている。そして
 社会病理学は、衰退の一途をたどっていると論じ
 ている。また、①個人趣味→家族臨床→社会臨床
 の一連の思考様式で捉え、社会病理学の対象と方
 法を学際的な色彩を帯びたものにする。②社会
 病理学の現実に照らせば、臨床的指向をもつ研
 究者及び臨床的実践に身を置く実務家が少ないこ
 と。③心理学と社会学の協働をはかること。④社
 会病理学は、問題解決指向を謳ってきたわりには、
 必ずしもこの役割を果たしていないこと、などを
 社会病理学の現状として挙げている。¹¹

さらに、「社会病理学」と「社会問題学」を超
 えるものとして、「臨床社会学」を提唱してい
 る。続けて、「事前評価 (assessment)」「介入
 (intervention)」「事後評価 (evaluation)」の必要
 性を説いている。心理学と社会学の協働を唱える
 など、極めて示唆に富んだ提言と言える。ただ「社
 会事象」に「事前評価」「介入」「事後評価」す
 ることは、「社会福祉援助技術」においてすでに行
 われていることだが、その有効性を測ることはあ
 る意味では困難なところもあることも事実であろ
 う。つまりマクロな社会の評価などはたいへん困
 難なのではないだろうか。

4. K.マンハイムの「時代診断学」の有効性 「解釈学としての社会病理学」「科学革命」へ 現代社会（福祉）学の問題点

4-1 K.マンハイムの「時代診断学」の有効性 「解釈学としての社会病理学」「科学革命」 へ

K.マンハイムの「時代診断学」は、ある意味で
 は [social pathology] と [social problem] の
 両方の要素をもつものと性格づけることができ
 る。

マンハイムは、半世紀上も前の社会学者である
 が、「(限界概念としての) 民主的権力論」「民主
 的パーソナリティー (権威主義的パーソナリティ
 の対概念)」「社会 (普遍) と個の一致 (過同調社
 会と自己愛社会を乗り越える)」「虚偽意識の克服」
 等の諸概念を挙げ、「時代の社会病理」に果敢に
 対決しようとした。

なぜ今、半世紀以上も前の社会学者K.マンハイ
 ムを持ち出すのかと訝る筋もあるかもしれない。
 答えとして、K.マンハイムは、「変革期における人
 間と社会」を終世人生のテーマとして考えていた
 こと、また人生の各時期において、その著作を「動
 的構造主義 (複雑性を伴う, dynamic totality)」
 の立場から再構成し続けたこと、つまりまだ終焉
 していない、社会病理学においても前提とされる
 であろう「個」と「社会」の緊張問題を「ポスト
 モダン (脱近代, ポスト構造主義)」の立場から
 熟考していたこと、そして「社会問題」「人間
 形成」の処方箋としての「社会計画論」から提言
 し続けたこと、などである。

マンハイムは「社会学的心理学」(the so-
 ciological psychology) を唱えたが、マンハイム
 は「真の計画とは制度と教育と価値の調整にある」
 と考えていた。そしてその骨子として、1.精神
 分析 2.プラグマティズム(実践主義)3.行動主義、
 を挙げた。

マンハイムの社会学は、言い換えると「文化の
 解釈学」ともいえるもので、それは3つの意味層
 から成っていた。1.客観的意味 2.表現的意味
 3.表示的意味、この中で最も重要なのが表示的意
 味であり、これは「論理実証を超えた真実なる意
 味の世界」であり、「直観 (直知) でのみ捉えら
 れるものだった。¹²マンハイムの解釈学は、T.クー
 ンの「自然の解釈学」とも不思議な相似形を成し
 ている、「科学革命」を志向するものである。

学問は、すでにポストモダン状況を呈してきて
 いることは言うまでもない。「実証主義的科学」

が心の問題により「構成主義」に浸食されている、テクニックと技術の意味で「実証主義」は必要であるとしても、調査の結果を読み解くのは、そして「病理の価値判断」を敢えて行う時も「解釈すること」しかないのではないか。

4-2 現代社会(科)学の問題点

社会学は「統計学」と「コンピュータの発達」で飛躍的に進歩したことは事実である。データ処理にはほぼ三つの段階がある。

(A) データをどのようにして収集するかという段階 (B) データ解析の段階 (C) データの解釈。質的データや統計的な処理をほどこされた量的データを前に、いろいろな知識を駆使して、その社会的な意味をひねり出す。これには並々ならぬ社会学者としての力量を必要とする。以上、社会学はデータ処理の面で、いちじるしく強化されたが、上記のように理論の面、解釈の面が立ち遅れてしまったのである。

5. 「社会病理学・臨床社会学」の目的とは

「心理的—社会的病理」(問題)を超えて「新しい能力」(ポスト近代化能力)を得ること

ここでは、「社会病理学・臨床社会学の目的」とは、前述したように、近代の「心理—社会問題」を解き超えて、「新しい能力」を得ることであると考えたい。K.マンハイムは主著の一つである『自由・権力・民主的計画』の中で、「進歩的教育」について七つの主要な構想を述べている。^{注13}

1. 伝統的な主題に即してよりも、機能的な中心や意図をめぐって全教科課程を組織すること。
2. それぞれ計画を含む大規模な研究課題またはまとまった学科単元を組織すること。それらは
3. 生徒の社会的に重要で自然的に統合された多様な能力を発揮する機会を得るために、実地での組織化、読書、手作業、および協力活動に関わるであろう。
4. 自己改善の満足感を他者との競争で勝つ満足感に代用させること。「達成しうる目標」を設定すること。
5. 在来の学校によってなされてきたよりも、

もっと現実的に個人的な差異を認識し利用すること。

6. 創造的な自己表現活動を奨励すること。
7. 学校を純粋に楽しいものにする。
8. 種々の活動と主題を、年齢による関心の正常な発達に従って時間的に配置すること。子どもに受入れの用意があるときに素材を与えること。

以上、半世紀以上も前に、K.マンハイムが提唱したこれらの教育構想とは、まさに1980年代、1990年代に入ってから、多くの先進諸国で共通して教育目標に掲げられるようになった能力に関する諸概念である「解釈力」「判断力」を重視する「新しい能力」(ポスト近代化能力)と類似のものといえよう。

6. 「新しい臨床発達人間科学」「臨床教育社会学」「体系(システム)社会学」の構成へ向けて

以上のような「新しい能力」(ポスト近代化能力)を人類は得て、学問の再編はどのようにすすんでいくのだろうか。マンハイムは学際的な「臨床教育社会学」の立場から、「民主的パーソナリティはいかに構成しうるか」という、道徳・人間形成問題を半世紀以上も前に取り扱った。マンハイムは「個」を重視しつつも、個の成長の契機としての「環境」の大事さをくり返し説いた。幼少時からの「発達障害」が、「人格障害」に固着する危険性があること、あるいは「人格障害・人格形成」の問題が、再び、現在においてクローズアップされていることを考えると興味深い。

混沌とした「世界社会」を変革する社会学・人間科学としてマンハイムの社会学の卓越している点は、その確固たる「歴史主義的世界観(弁証法とは異なる)」、また独特ではあるが、ある意味では伝統的な実在観、その認識論的視座構造を支える「認識論の三項関係」(主観—客観図式を超える)である。

三項関係から導かれることであるが、マンハイムの実在とは「生」であり、その実在は、「形相」と「質量」を融合しようとする。その歴史的認識論は、「精神」だけを取り上げ、「概念」を最重視するG.W.ヘーゲルとも「唯物弁証法」をとるK.マ

ルクスとも当然相違する。^{注14}

マンハイムの立場である「第3の道 (A. ギデンズよりも半世紀以上前の提唱である)」からの社会・世界変革が再考されることは緊要なことである。マンハイムの「臨床教育社会学」の3つの主要な柱は、1. 精神分析 2. 実践主義 3. 行動主義、であると言われている。

またマンハイム自身は詳しい叙述は早逝したため行ってないが、学際的な自らの人間科学を「体系 (システム) 社会学」ともよんでいたことを付け加えておきたい。

7. 病理 (疎外) より世界変革へ向けて

真のソーシャル・インクルージョンを求めつつヘーゲルとマルクスを超えるマンハイムの「第三の道」
高次の「社会病理学・社会福祉学・臨床社会学」とは

世界社会への現状分析を1. 政治 2. 経済 3. 文化の三つの分野から行くと、1. 政治の分野では国家中心の「リアリスト・パラダイム」から超国家的な「トランスナショナル・パラダイム」への移行、2. 経済の分野においては、利他主義的な利益追求のみを求める新資本主義的な「後期資本主義」から、創造的な破壊を行いつつも、適切な競争原理を踏まえた共栄的な体制へ、3. 文化の分野においては、「自己愛型・過同調社会の矯正」が必要ということになるだろう。

これに加えて、よく引用されるハンチントンの『文明の衝突』以来、各文明・各宗教の自己主張が盛んになり、「南北 (経済格差) 問題」「環境破壊」などの世界の問題を解く際にも、各文明間・宗教間の調整という機能が緊要なものとなってきている。それゆえ諸問題に立ち向かうためには、具体的な制度・インフラストラクチャの改革などの形而下的なアプローチだけでなく、形而上的な次元でのアプローチが必要になるわけである。

「近代 (現代を含む)」とはどういう時代であったか。まさにそれが「二分法」(Dichotomie) という近代を特徴づける方法を作り上げ、近代を「主体-客体の分離 (分裂) の時代」としてきた。さて新しい時代に必要とされているのは、「主体」と「客体」の間に立つ、しっかりとした第三項である。

この第三項をつくりあげることを目指しながらも失敗してきたのが「近代哲学」そして「近代」という時代であった。静的な哲学においてもカントの「意識一般」(Bewusstsein Ueberhaupt) やフッサールの「独我論」、動的な哲学においてもヘーゲルの「精神」を中心とした「弁証法」やマルクスの価値を逆転させた「唯物弁証法」も基本的には二分法の産物であり、一元論であり、「精神」か「物質」かのどちらかのみを採る。これは「第三項」の定立を基準とした場合、「虚偽意識」(falsches Bewusstsein) の産物であるといえよう。

このように病理的な「虚偽意識」を正し、「健康な意識」を取り戻すことが、まさに「社会病理学」「臨床社会学」「社会福祉学」の使命なのではなかろうか。斯学の目標はこのように大きいのである。

8. 実効ある「社会福祉教育」を行うこと

具体的な「物語」から社会福祉を学ぶ

高邁な社会福祉理念を若年女性 (保育士志望者) に教授する困難さ 「反省的实践力」を得ること

8-1 「反省的实践力」が保育士に必要な理由

私が所属する埼玉純真短期大学は、保育士・二種幼稚園教諭・二種小学校免許を授与する養成校である。

社会福祉職である保育士養成のための「社会福祉教育」は、若年女性にとって、ある意味では抽象的すぎ、難解なものである。「反省的实践力」を得ることはまことに難しい道程である。

保育士に必要なとされる社会福祉学的素養とは膨大なものである。日々の地道な「子どもの生活リズムを養う」という保育行為以外に、障害をもったり、虐待や貧困問題等、様々なトラウマを受けた子どもたちの心を癒しつつ、ケースワークを行い、社会的に彼らを自立させ、また行き過ぎた格差とも戦い、本当の意味でのインクルージョンを果たしつつ、「共生社会」「市民社会」をつくるお手伝いをするという保育士像は、あまりにも理想的すぎはしまいかとも考える。

このような高邁な保育士像は、単なる絵に描いた餅に終わる可能性はあるとしても、やはり切に望まれている保育士像なのである。

ではどうすれば、そのような「反省的実践力」をもった保育士が養成されるのだろうか。

8-2 「物語ること」の重要性

「物語ること」「物語」とは、膨大な人間の経験・知恵の中で幸運にも文書化できた、しかしなお、際限のないそれらを、後世の世代の者に伝えることである。それは愛・やさしさ・敵意・悲しみ・善・嫉妬・悪の塊であり、「保育内容」としては、一定の制限を受けている(白雪姫の継母が、真っ赤に燃えた靴を履かされ、死ぬまで躍らせるや、シンデレラの姉が、靴に合わせて足を切る、なぜピーターパンのネバーランドに大人がいないか。成人になる前にすべて殺されるからである、等、本来の話は残酷である)。

8-3 具体性と抽象性の媒介

半世紀以上も前の社会学者K.マンハイムは、現実生活に必要な具体的思考と哲学的・学問的思考の融合を説いた、それが「媒介原理」(principia media) というものであるが、この「具体的思考」とは、日常的思考を抽象的な学問と媒介させねばならない。なぜなら、「哲学的・抽象的反省力」は、「真」「善」「美」などの概念を導き、そしてそれらは、より良き社会をつくるからである。

8-4 社会福祉・児童福祉学習において

「物語」から入り「理論」(well-beingなど)理解へ

実は、臨床心理学・ケースワークで行う「事例研究」そして保育学で行う「エピソード記述」そのものが新しい特殊な物語、あるいは古い物語の継続であると考えられる。

また「日本の昔話」「グリム童話」などの定まった物語を読むことも、学生にとっては大事なことであろう。

日本の昔話は、西洋のそれと比べると派手でなく、面白味が薄く、現代の生活と縁遠いと思われることもある。しかし、音読して読み聞かせたりすると、擬態語・擬音語などの面白さも加味されて、人間・動物・自然・妖怪・神々の世界が一体となって、きわめて面白い。ざっと挙げるだけでも、『座敷わらし』『雪女』『鶴女房』『馬子と山姥』『泣いた赤鬼』『天人女房』『猿夫』『うりひめ』『飯

食わぬ山姥』『こぶとりじい』など等。

特に山姥もの、雪女、つる女房など、女性の悔しさ、悲しさを謳ったものに凄さが潜んでいるように思える。これは精神分析学者である北山修が述べている、「イザナギ・イザナミ神話」で見られる、心理—社会の分離である「見るなの禁止」であろう。

わかりやすく言えば、イザナミの死体を見てそのおぞましさに震え上がって逃げたイザナギ(男性の代表)に対する女性からの落胆と憎しみである。それはまた、臭いもの(コンプレックス・無意識)に蓋をし、無視することに対する批判(社会的偽善への批判)でもあるのである。落合恵子氏の小説に『奇妙な愛の物語』というのがある。これは、ある女性が男性を好きになると、必ずデパートにれて行き、その最上階から、その好きになった男性を突き落とすというものである。^{注15}

これを倒錯という病理学的な安易な言葉や「母性社会日本の病理」というような狭い解釈に押しとどめては本質を見誤ると考えられる。このような女性性は、世界的に見て、西洋の魔女、インドネシアの「魔女ランダ」に見られるように、かなり普遍的に見られるのである。

さて次に、「グリム童話」であるが、これもまたざっと挙げてみると、『はちの女王』『鉄のハンズ』『みつけどり』『手無し娘』『赤ずきん』『金の鳥』『白雪姫』『ヘンゼルとグレーテル』『星の銀貨』『かえるの王子様』『ろば王子』など等。

日本の昔話では、「山姥」は、良い姿でも悪い姿でも出てくるが、グリム童話では、魔女は悪者と一般に決まっているように思われる。また、「ロバの王子様」に出てくる、王子の気高さを初めから見抜き、りっぱな王子にとして愛している王女と、「かえるの王子様」で見られるような、かえるの姿をした王子を最後まで嫌いつつ、最後に変身し、立派になった王子と結ばれるという王女も、ふたつの話が対になっていてたいへん興味深い。前者の王女がソフィア、後者の王女が、大地母神的女性(山姥)と言えなくもない。しかしおそらく、多くの女性は、その二つの間でゆれ動き、がんばって生きているのであろう。^{注16}

このような日本や西洋の昔話の描く世界像が、現在の保育士養成の一教科である「社会福祉」(幸せ、well-being、より善く生きることを追求する教

科)の基本的・全体的基礎を構成していると言えないのではないか。

8-5 社会福祉的な物語について

上記のような人間的知恵の全体性を示す物語の重要さはさることながら、より限定的に社会福祉のテーマを取り扱っている「物語」もある。

少し挙げてみると、『幸ちゃんの魔法の手』『クシュラの奇跡』『わたしたちのトビアス』『私たちのママはアスペルガー』『だれが わたしたちをわかってくれるの』『耳のきこえない子がわたります』『たいせつなこと』など等。

これら社会福祉という教科と密接にかかわる「物語」への着目とそれらの整理も大事であろう。

8-6 「社会福祉」授業の構成について

私の社会福祉授業においては、まず、好きな物語を選ばせ読ませることになっている。また教科書として「事例」（一種の物語）を数多く紹介している吉田真理著の『社会福祉』（青踏社）を採用している。この本は、事例という具体性と理論を、高度に媒介・融合させている好例である。

また初年次教育としての「レポート作成」を重視し、レポートの書き方・書式の徹底、アイデア表出のための「KJ法」などを指導している。

これは高校以下でも重視されつつある、総合学習的な学習・調べ学習を重視し、学生の問題意識を発展させるためである。

また集団的な読書法である「アニマシオン」^{注17}を行っている。これはきわめて効果的な「反省的実践力」養成のための読書方法である。本を一人では、なかなか理解できない学生の支援・援助になっていることも最後に付け加えておきたい。

(引用文献)

1. 入江良英 「特別支援教育（保育）とは何か～育成保育を超えて～」 埼玉純真短期大学 『『経度発達障害』の幼児童に対する特別支援力のための教育職員再教育プログラム』 2010年 6頁

2. 「新感覚統合論」とは、1970年代のジェーン・エアーズらの感覚統合理論を最新の科学等で補強するものと筆者は考えている。

3. 河合隼雄 『母性社会日本の病理』 講談社 1997年
4. 北山修 『日本人の原罪』 講談社 2009年 2～30頁
5. 中村雄二郎 『魔女ランダ考』 岩波書店 1990年
6. 橋本考著 『福祉の町ベーター』 五月書房 2006年
7. 岡田尊司著 『パーソナリティ障害がわかる本』 ちくま書房 2014年
8. T.G.ウェスト 久志本克己訳 『天才たちは学校がきらいだった』 講談社 1994年
9. H.ガードナー 黒上晴夫訳 『多元的知能の世界—MI理論の活用と可能性』 紀伊國屋書店 2003年
10. 森田洋司他編 『新たなる排除にどう立ち向かうか』 学文社 2009年 34頁
11. 畠中宗一編 『臨床社会学の展開（現代のエスプリ）』 至文堂
12. K.マンハイム論文 「世界観解釈への寄与」 『マンハイム全集 I』 潮出版 1975年に所収
13. K.マンハイム著 池田秀男訳 『自由・権力・民主的計画』 未来社 1971年
14. マルクス主義は、自らの立場のイデオロギー的性格を認めなかった。マンハイムは、これを批判し全ての集団に「存在拘束性」を認め「虐疑意識」とした。

15. 落合恵子 『奇妙な愛の物語』 講談社
1982年

16. 「アニマ (男性の中の女性像)」「アニムス (女性の中の男性像)」は、共に肯定的・否定的な役割をもっている。人は人格の統合のため両者を心の中で受け入れる。その他にも無意識の中には様々な「元型」がある。

17. 有元秀文 『読書へのアニマシオン入門』 学習研究社 2002年, 岩辺泰史 『はじめてのアニマシオン』 柏書房 2003年 等を参照